



# 「読み解く」から始める「歴史総合」

## —理解の深化を支援するICTの活用—



—使用教材—

『明解 歴史総合』

秋田県立秋田西高等学校 伊藤 真司 (いとう・しんじ)



### はじめに

令和4年度から新科目「歴史総合」が始まる。新学習指導要領では「歴史総合」を履修したのち「世界史探究」または「日本史探究」を履修するとされるが、「探究」の授業を視野に入れた「歴史総合」の授業をどのように組み立てればよいかイメージしづらいと感じている方も多いのではないだろうか。そこで、「世界史探究」と「日本史探究」での学習内容との関連を踏まえて「歴史総合」の授業のあり方について考えることを第一歩としてみるのもよいかかもしれない。「日本史探究」では、「歴史総合」で学習した歴史の学び方を活用し、前近代を中心とする学習によって思考力の育成を進め、現代の日本の課題を探究する。「世界史探究」では、「日本史探究」同様に「歴史総合」で学習した歴史の学び方を活用し、生徒が世界の歴史の大きな枠組みと展開への理解を深め、地球世界の課題について探究する。

本稿では、「世界史探究」「日本史探究」への接続を視野に入れ、新学習指導要領の内容に沿って令和4年度以降用『明解 歴史総合』（以下、教科書）を用いてどのような授業が構築できるかを考える。また、現在整備が進みつつあるGIGAスクール構想のもとでのICTを活用した学び方の一例としても提案したい。今後、多くのICT機器や各種サービスが高校の教育現場に導入されることだろう。「歴史総合」でも、何をどのように活用すれば学習効果が高められるか実践例を蓄積し、共有することが必要となる。そこで、比較的導入が進んでいると思われるインターネットに接続可能な電子黒板と、タブレット端末を使って学習できるWi-Fi環境が教室に整備されていることを前提として、本授業案を提示する。



### ② 「歴史総合」の評価について

授業案を検討するにあたり、評価方法についても確認

したい。新学習指導要領のもとでの歴史領域科目では、大項目が内容のまとまりとなっており、評価規準は内容のまとまりごとに作成することとされている。その考え方を踏まえて単元の評価規準を作成する。評価規準は、これまでの4観点から「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到整理された。とくに「思考・判断・表現」についてはそれぞれの見方や考え方に沿って、具体的な視点などを組み込んだ評価規準を設定する。この観点においては、単元を見通した「問い」を設定し、「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を働かせることで、社会的事象などの意味や意義、特色や相互の関連などを考察したり、社会にみられる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする学習をいっそう充実させることが重要である。「主体的に学習に取り組む態度」については、教科の特性を踏まえつつ、単元をこえて評価規準を設定するなど、ある程度長いくざりの中で評価することも考えられる。実際の授業では、生徒の個人活動あるいは協働による要点整理や意見交換、短文論述、さらに口頭での発表などが上の3観点の評価対象に該当する。本授業案では、個人による要点整理と短文論述を取りあげたい。

### ③ 教科書の本文構造を「見える化」する

教科書では、文字資料や統計資料、年表、図版が豊富に掲載され、各章の学習課題が明確に示されている。また、各単元の学習課題も見開きごとに示される「確認」「説明」といった課題について考えることで、学習課題の解決に結びつけられるように思考の補助線が引かれている。教科書に示されるそれらの課題について考える活動を通じて、生徒の読解力や表現力を養うことが可能となる。

生徒が第一に取り組むべき学習活動は、教科書の内容構造の確実な理解である。教科書は、本文もコラムも歴史上のできごととその原因や歴史的意義が整理されて記

述され、地図や図と本文との関連性も見えやすくなっている。生徒が本文を構造的に理解することで、歴史的事象の関連性を理解することにつながる。それこそが生徒自身の関心や疑問を引き出す下地となる。教科書読解は、歴史的事象の因果関係などについて、生徒それぞれの「わかること」と「わからないこと」を切り分ける活動である。おそらく、教科書の本文で簡潔に説明された箇所については因果関係をつかみきれず、「わからないこと」とするだろう。さらに生徒は、「わからないこと」を起点として「問い」を立てるが、それは、用語集や資料集、参考書や一般書、さらに専門書に記載されているような事実関係に関する基本的な疑問かもしれない。しかし、「歴史総合」で読解力を高める訓練を行うなかで、ささいなことであっても生徒が自ら歴史的事象に疑問をもつことが、よりよい「問い」を立てる力をはぐくむと考えている。

この学習活動は、「世界史探究」や「日本史探究」においても生徒自身が教科書を適切に読み解き、「問い」を立てて探究する学力につながるのではないだろうか。

生徒が教科書を読むときには、太字であるなしかかわらず、単元の中で最も重要であると思われるキーワードを見つけ、鉛筆を使って□や○で囲んだり、またそれを説明する該当箇所にも下線やアンダーラインを引き、それらを結びつけることで本文そのものの構造を「見える化」する。その活動によって歴史用語と本文の関連性を生徒自身が把握し、どこに何がどのように記述されているか、人名・できごと・地名について認識することとなる。国語科でも同様の取り組みを行っている事例に心あたりがあるかもしれないが、「歴史総合」の教科書を読み解くためにも非常に有効な手段である。カラフルなマーカーで本文の大部分が塗られてしまい、どこがだじかわからない状態になっている生徒の教科書を多く目にしたことから、この取り組みを始めることとした。よっ

未来へ活かす歴史

### 国民国家形成の陰で

プロイセン主導のドイツ統一からはじき出されたオーストリアは、ハンガリー人(マジャール人)に自治を認める妥協をして、オーストリア-ハンガリー(二重)帝国を成立させた(→p.49)。この妥協は、帝国の支配民族であるドイツ人と非スラヴ系のハンガリー人のバランスの下で帝国内のスラヴ系諸民族を支配するものだった。法律上、国内の諸民族は平等とされ、それを保障する政治や教育のしくみも導入されたが、その実現は容易ではなかった。帝国の崩壊後、スラヴ系諸民族はみずから国民国家を建国したが(→p.108)、それらは実際には多くの少数民族を含み、後に激しい民族問題を引き起こした(→p.186)。

↑4 バルカン半島の民族分布

展開し、これに伴って労働運動、社会主義運動が各国で強まった。これらの運動との対立関係から、それまで市民革命を主導してきた資本家は、貴族など旧支配層と結んで国家と産業の発展を目指すようになっていった。また、種々の集団の利害を代表する政党が生まれ、議会が最も重要な政治的決定機関となっていくなかで、選挙権の拡大をはじめ、自由・平等の原理が広がり、市民社会への歩みが決定的となった。

**ナショナリズムと国民国家** 19世紀後半の新たな状況のなかで政治を導いたのは、一つの民族(国民)が一つの国家(国民国家)をつくることを理想とする、ナショナリズムだった。しかし、実際にはオーストリアのように、国内にはさまざまな民族が混じり合って住んでおり、そのなかで多数派を占める民族が国家を運営した。このため、国民国家において国境を画定し領土内のすべての人々を国民として統合しようとする過程で、少数民族や少数集団が抑圧されたり、言語や宗教を同じくする従来の地域的まとまりが破壊されたりするなどの問題が生じた。

**フランス第二帝政の成立** フランスでは、二月革命後、大統領選挙でルイ・ナポレオンが当選し、1852年には皇帝となってナポレオン3世と称した(第二帝政)。彼は国内産業の保護・育成に努めるとともに、海外進出を積極的に行った。英露の影響の少ない東南アジアへ進出し、清と対決しながらベトナムの一部やカンボジアを支配下に置いて仏領インドシナ連邦の建設に着手した。イギリスに次ぐ植民地保有国の地位を築いたが、普仏(プロイセン-フランス)戦争の敗北により、帝政は崩壊した。屈辱的な講和条件を知ったパリ民衆が蜂起し、史上初の労働者の政権とよばれるパリ・コミュンが成立してパリを支配したが、2か月後、臨時政府軍に鎮圧され、75年に第三共和政の憲法が成立した。



↑5 ミュシャ作「スラヴィア保険相互銀行のためのポスター」アール・ヌーヴォー(→p.82)の画家として知られるミュシャは、オーストリア支配下のチェコで生まれ、スラヴ民族の独立を訴える作品も数多く手がけた。

世界日本

### ナポレオン3世と江戸幕府

対外政策の成功によってフランス国内での支持を得ていたナポレオン3世は、貿易拠点の確保のため、幕末期の江戸幕府にも接近した。幕府に対して、軍事顧問の派遣(→p.65)のほか、横須賀製鉄所設立のための支援などを行った。しかし、メキシコへの出兵の失敗やヨーロッパ情勢への対応から日本への介入の余地がなくなり、戊辰戦争に対しては、国家としてはイギリスなどと足並みをそろえ、中立策を取った。

↑6 ナポレオン3世から贈られた軍服を着る徳川慶喜

確認 ナショナリズムについての説明を、本文から書き出そう。

説明 「1848年は近代ヨーロッパの転換点」とはどのようなことが、説明しよう。

図1 『明解 歴史総合』p.48の本文構造を「見える化」した紙面例

て、この活動でマーカーの使用は禁止である。

## ④ ICTを活用した「歴史総合」

先述の手法を用いながら、本授業案では教科書「2部近代化と私たち 3章 近代化の進展と国民国家形成」からp.47～48「1848年～近代ヨーロッパの転換点」を例として紹介したい。

はじめに、p.46の3章の学習課題「近代化が進むなかで、欧米諸国はどのような国家を形成していったのだろうか」を電子黒板に表示しながら、p.47を開くよう指示する。

### 活動1 《10分》

教科書のp.47～48の内容を読み、本文の内容についてアンダーラインを引きながら構造を把握する(図1)。読みながら、以下の3つに取り組むよう指示する。

- ①フランスの七月革命や二月革命、ドイツの三月革命で民衆が求めたものはなにか。フランスとドイツそれぞれ

れについて□で囲め。

② 1848年の革命によってヨーロッパ社会はどう変わったか。該当部分を□で囲め。

③ 教科書 p.47 の『諸国民の春』の絵を見ながら、黒・赤・黄と緑・白・赤の旗を持って行進している人々は、のちのどの国の人々か考え、右の「二月革命の広まり」の地図に○で囲め。

①について大多数の生徒はフランスについては「選挙権の拡大」や「議会の改革」、ドイツについては「憲法制定」を囲むだろう。②については p.47・18 行目から p.48・6 行目までの間で複数考えられるが、多くは「市民社会への歩みが決定的」を囲むことが予想される。③については、イタリアは即答する生徒が多いかもしれないが、ドイツについては現在のドイツ国旗と縦横が異なることから、すぐに答えられないかもしれない。また、ベルギー国旗と答える生徒がいることも予想される。イタリアやドイツについては、次の単元でイタリア・ドイツの統一を扱うため、簡単に触れる程度にする。

## 活動2 《25分》

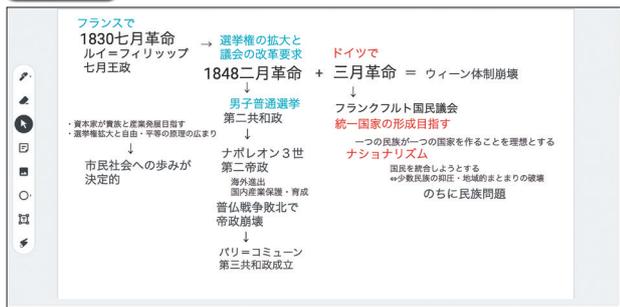


図2 「Jamboard」にまとめた例

教科書を見ながら、「Google Workspace for Education」のデジタルホワイトボード「Jamboard」を開き、テキストボックスを配置して本文の内容を整理する。また、活動1で□で囲んだ部分を簡潔にまとめて配置する。まとめかたは、教科書本文の記述どおりに並べて整理する生徒や、フランス、ドイツそれぞれの地域ごとにまとめる生徒もいるだろう。その際に、ナショナリズムや国民国家という語句をどこに位置づけるか工夫するように指示する。この活動は、「Google Workspace for Education」に対する生徒の習熟度合いにもよるが、比較的短時間でまとめ上げられるようになるべくシンプルにするよう、机間巡視しながら声がけをする。教科書をノートにまとめることは家庭学習で行う生徒も多いかもしれないが、限られた時間で要点のみをまとめ上げる活動は、教科書を的確に把握していなければ成立しない。内容をまとめるために、すべての生徒が教科書を丹念に読解することになる。加えて、「Jamboard」は、指導・

学習管理ツール「Google Classroom」と連携することで生徒間の共有が簡単にできる。教師は、共有した「Jamboard」の中で、いくつかの解答例を取りあげて電子黒板に表示し、教科書中に示されている、ナショナリズムの訳語である「国民主義」や「民族主義」を解説する。その際に、フランクフルト国民議会やハンガリー独立運動、さらに p.48 のコラム「国民国家形成の陰で」に触れながら、国民国家建設と少数民族の抑圧という二つの側面についても触れ、ナショナリズムのもつ広い意味について確認する。このような解説を受けて、それぞれの生徒が自身の「Jamboard」に加除訂正を加えて要点を整理する。これらは、自動保存されて生徒がそれぞれの復習用教材として活用できるようになる。

1848年前後を理解するために必要な語句の一つであるナショナリズムについては、本単元の2部3章1節のあとにも、2部5章1節「新政府の誕生」、3部2章4節「ヨーロッパの復興と大衆の政治参加」や4部1章4節の「中東戦争とパレスチナ問題」などにも出てくる概念であり、「民族主義」「国民主義」「国家主義」という複数の訳語の違いをそれぞれの歴史的事象から学びとることができる。他の単元でも、歴史的事象を理解するためにナショナリズムの概念を必要とする箇所は数多い。教科書の学習を進めることによって既習事項を振り返りながら、歴史の大きな枠組みを、ナショナリズムというキーワードを通じて考えることができるのではなかろうか。「現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を理解する」ためにも、このように比較的長い時間をかけて一つのキーワードに複数回触れながら定着をめざすことが重要である。そのためにも「Jamboard」の保存は振り返り活動を素早く行える点で有効である。

## 活動3 《5分》

教科書の内容をまとめ、生徒どうしが要点整理について共有した時点で、p.48の「説明」課題にある「1848年は近代ヨーロッパの転換点」とはどういうことか、簡潔にまとめる。まとめる際には、以下の語句を使うよう指示する。

[資本主義, ナショナリズム, 国民国家, 民族主義, 市民社会]

この活動では、あえて学習用ワークシートに生徒それぞれが鉛筆で記述する形式をとる。先の活動でICTを活用したが、記述式の練習を手書きで行うことで、定期考査での記述式問題にも対応できるように配慮する。また、語句指定をするのは、記述力向上をスモールステップで行うためである。3部や4部の単元で同様の記述式



図3 『明解 歴史総合』で使用できるQRコンテンツ一覧



図4 QRコンテンツ内の「一問一答」



図5 「一問一答」の解答画面

の練習を行うときには、指定語句を徐々に少なくしながら、3部では語句を三つ、4部では語句を二つあるいは一つとするなど、年間を通じて少しずつ記述力を高めていきたい。

#### 活動4 《5分》

これらすべての活動を行ったうえで、教科書の巻頭7に示されているQRコードをタブレットで読み取り、QRコンテンツにアクセスする。すると「一問一答」「用語解説」「動画」「地図」「年表」「外部リンク」が出てくるので、そのうち「一問一答」を開く（図3）。「2部→3章→1節 1848年～近代ヨーロッパの転換点」の練習問題10問に取り組み、基本的な語句の確認を行う（図4・図5）。問題はランダムに出るために、繰り返し学習でも答えを順番どおり機械的に暗記してしまうこともない。

以上の学習活動を合計すると45分である。活動としては多いと感じるかもしれないが、板書をノートに書き写すことがないため、生徒自身が考えて活動する時間を確保でき、思考を中心とした授業内容を充実させられる。これまでもプリント学習によって進度を早めることができたという経験をしたが、ICTを活用することで、学習内容の密度を維持しながらテンポよく授業を展開できている。また、ICTの活用は、学習の成果物を簡単に保存できることも利点としてあげられる。これまで行っていた付箋を活用したワークショップ形式の授業では、生徒が記述した付箋を写真に撮って学習の成果として保存していた。しかし、「Google Classroom」のようなクラウドサービスを活用することで、いつでも振り返ることができるのは、教師にとっても生徒にとっても有益である。また、教科書のQRコンテンツも今回は「一問一答」以外活用できなかったが、「地図」や「動画」資料も閲覧できることから、資料集を補助するよう

な使い方が可能となる。今後のコンテンツのさらなる拡充に期待したい。

## 5 おわりに

歴史の学び方がこれまでと大きく変化するなかで、生徒自身が「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を働かせ、歴史を学ぶことによって現代の世界を正しく認識できる力を養うことができる授業をめざしたい。なかでも、生徒自身が「歴史総合」の授業を通じて読解力を高め、自ら問いを発して「探究」できる力を身につけ、「世界史探究」や「日本史探究」にスムーズに接続するためにどのような学習方法が有効か、数多くの事例をみながら検証するにはまだ時間がかかるだろう。また、教室への電子黒板の設置やWi-Fi環境の整備、生徒のタブレット端末一人一台利用や各種Webサービスの活用など、学習用ICT環境の設備導入の進捗にも学校ごとに差があるだろう。とはいえ、コロナ禍の現状では、オンラインでも教室でも多少の変更で実践できる授業方法が求められているはずである。そのような可能性を踏まえて本授業案を提案する。今後は、生徒自身による単元ごとの理解度の自己評価と、その自己評価を受けて授業改善に結びつけるワークフローの確立を優先課題としたい。

本稿が厳しい世情でも生徒の学習活動を止めず、「生徒一人一人を生涯にわたって探究を深める未来の創り手として」はぐくむことのできる授業を実現するための一助となれば幸いである。

#### 〈参考資料〉

- ・ジャパンナレッジ School『日本大百科全書(ニッポニカ)』小学館 (<https://school.japanknowledge.com/jks/>) 2021年8月閲覧
- ・文部科学省(2018)『高等学校学習指導要領(平成30年告示) 解説地理歴史編』
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター(2021)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 高等学校 地理歴史』
- ・株式会社ストリートスマート&できるシリーズ編集部(2020)『できる Google for Education コンプリートガイド 導入・運用・実践編 増補改定2版』インプレス